九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

意味と無意味

根井, 豊
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1445866

出版情報：哲学論文集. 48, pp.1-20, 2012-09-29. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

意味と無意味

根井　豊

序　或る光景

次のようなことを想像する。ひとが発した声は、一瞬、ひとの耳に聞こえるほどに空気や水を揺り動かし、たちまちにして過ぎ去ってゆく。聞こえなくなったその声はしかし、ライプニッツのいう微小表象のように、無限に小さくなりながらも消え去ることはない。一旦空気や水を揺り動かしたその声は、無限に小さな波動となって空中にまた水の中に漂っている。そしてこれまで生きてきた多くの人々の喜びや悲しみの声が、もはや聞こえない声となって重なりあい混じりあって空中に、海中に充満している。そのような声が、風の音とともに、或いは波の音となって、空気の中からまた海の中から再び響き出してくる。風が森を吹き抜けるとき、木々に裂かれた空気の裂け目に出口を見出してあふれ出るかのように、風の音とともに、ひとびとの喜びの声が、いやむしろ悲しみを多く含んだ声が響き出してくる。あるいは海の水が波となって岩や砂に砕かれて飛び散るとき、海中にこもっていた人々の声が、波の音とともに響き出してくる。

目の前の光景が、歴史のひとこまと重なるとき、その風の音にまた波の音に、海に沈んだひとびとの声が入り混じり響いてくる。沖縄の平和祈念公園は、湾曲して海にせり出した断崖の上に、はるか下の波打ち際から、岩に砕ける波の音が寄せ集まって響いてくる。海からの風も波の音を乗せて吹き集っている。その断崖が、敵軍に追われ逃げまどい、行き場を失ったひとびとが最後に身を投げたあのサイパン島の断崖の映像と重なり合う。自分のことなのに、なぜそういう事態になってしまったのか、おそらくはわからないままに。…風の音、波の音がひとの叫び声となって耳の奥に響き渡り、全身を浸していく。そんなことがあってはならない、そんなことが起こってはならない、そのような思いが、心の底から、否、心の底からというよりももっと深いところから、地の底から、あるいは海の底からわきあがってくる…。歴史の情勢に巻き込まれ、その意味もわからないまま、死んでいった者たちが多くいたこと、また将来もそのようなことはありふれたこととして生じるとしても、そのような事実にもかかわらず、やはり、そんなことはあってはならないと思う。

歴史家のつとめは、そのようにこれまで聞き届けられることのなかったひとびとの声を、とりわけ悲しみの声を聞き取り、その事実を掘り起こし書き記して、顕わにすることであろう。政治学者は、なぜそのようなことが起こったのか、そのメカニズムを解明してくれるであろう。一方、哲学者のつとめは、事実としては生じたこと、将来も生ずることであろうにもかかわらず、すなわちそのような事実に関する認知的な側面を越えて、「そんなことがあってはならない」と主張しうる根拠を明示することであろう。直感的あるいは感情的な反応と思われるこのような主張が成立しうる由来を、そのような反応をする存在としてわれわれ人間が存立しているという事実の確認とともに示すことであろう。あるいは「人間は幸せであるべきだ」と主張しても、それがどんなに切ない願いであっても、単なる願望に過ぎないならば、その冷厳な事実を受け入れざるをえないように、人間の存在の無意味さという事実を受け止めざるをえないのであろうか。歴史家、政治学者、哲学者、さらにその他という区分が重要な意味をもつわけではない。またそのような分業などせず、ひとりの人間が総合的にひとつの出来事として、その事実を掘り起こし、そのメカニズムを解明し、それに対する感情的あるいは倫理的反応のよってくる根

拠を示しうることが理想的なことであろう。しかし対象として自分からの距離を置いて出来事を捉える捉え方を超えて、みずからの存在を巻き込んだ人間存在のあり方からする事象の解明は、とりわけ哲学者の存在にかたちを与えるつとめであろう。

「そのようなことがあってはならない」という思いの背景には、人の命や人生が、そしてその死が無意味に扱われてはならない、それぞれのひとの存在は意味をあるいは価値を有しているのだという人間存在についての把握が置かれている。少なくとも、そうであってほしいという願望があるだろう。ひとの生を無意味化するような事実が生じていることに対して、あるいはむしろそのような事実が生じているがゆえに、「そのようなことがあってはならない」という主張が出てくる。小論の目的は、そのような主張の成立根拠を探ることである。すなわち、例えばひとびとの悲しみを、たんなる私的な感傷であるという捉え方を越えて、或る状況を悲しいことと感じるような存在の仕方において人間は存在しているという存在の事実のうちに捉え返し、そのような存在の成立構造のうちに、人間存在の意味あるいは価値を見出す可能性を探ろうとするものである。それはその前段階として、人間存在の意味をなみする思考の成立構造を検討し（Ⅰ）、そのうえで、ひとの存在することあるいは生きることに（さらには死ぬことに）意味や価値があるということが可能であるとすれば、その価値や意味の具体的内容（例えば、快、幸福、自由、徳の完成等）を検討する前に、それはどのような条件のもとで可能なのかを確認する必要があろう（Ⅱ）。

Ⅰ―1　ニヒリズムの事例

ひとは死ねばすべてが無に帰する。生きているあいだの努力も徒労に終わる。束の間の人生を終えて、ひとはすべて再び土に還る…。このような言葉を並べると、あのコヘレト（コーヘレス）の言葉が、ある種の真実味をもって重く響いてくる。

「既に死んだ人を、幸いだと言おう。更に生きて行かなければならない人より幸いだ。いや、その両者よりも幸福なのは、生まれてこなかった者だ。…」[1]

すべてが無に帰する、人間の営みの無益さ。すべての人間の努力を徒労に終わらせるむなしさ。塵から出て塵にもどる死すべき存在のはかなさ。[2] 快楽を追い、富を得、望むものすべてを手に入れたとしても、過ぎ去った今、顧みればすべて空しいものではないか。知恵が愚かさにまさることを知っていても、賢者に起こることと愚者に起こることに変わりはない。善人がその善ゆえに滅びることもあり、悪人がその悪ゆえに長らえることもある。これらの事態は人間存在の無意味さを重苦しく刻印する。

「心理学的状態としてのニヒリズム」が生じるのは、ニーチェによれば次の三つの場合である。[3] すなわち第一に、われわれがすべての生起のうちに空しく「意味」あるいは「目的」を求めるときである。「達成されるべき」目的である「道徳的世界秩序」、「存在者たちの交わりにおける愛と調和の増大」等々が生成のうちでは何も「達成されない」ことが明らかになるときである。

第二に、「すべての生起のうちにまたすべての生起のしたに全体性、体系化、組織化が置かれるときである」。つまり「おのれより無限に卓越した全体者」への連関から、おのれの存在の価値を見出そうとするのであるが、そのような「一般的なもの」など存在せず、むしろ「おのれの価値を信じることができるために」そのような「全体者」を倒錯的に構想したにすぎないことが明らかになるときである。

第三の、そして最後のニヒリズムの形式が生じるのは、この生成の世界を迷妄と判決して、彼岸に「真なる世界」を考案するが、それは単に心理学的要求に由来することに過ぎず、そうする如何なる権利もないことが悟られるときである。

こうして、「意味」や「目的」を欠き、「統一性」を失い、「真理性」を剥奪された、唯一の実在性としての「価値の無い」生成の世界が現れてくる。

われわれは人間の為すことの無意味さ、さらにはその存在の醜悪さを例示するものとして、カミュの『シーシュポスの神話』や、スウィフトの『ガリヴァ旅行記』におけるストラルドブラグとヤフーの物語を付け加えることもできよう。岩を山上に運び上げては、岩は下へと転がり落ち、再び山上へと運び上げることを罰として永劫的に反復するシーシュポスの業（ごう）は、個人的あるいは集団的な人間の行為の成果を常に無みし、新たに事を始めながら、それが再び無に帰していく、そのようなことを繰り返している人間の営みの無意味さを如実に描き出しているではないか。またスウィフトは、欲望むき出しのヤフーの姿に、また衰えても死ぬことのできないストラルドブラグに、人間性のうちに潜む嫌悪をもよおす動物性[4]の露出を描き出している。国に帰還したのちのガリヴァが人間嫌いに陥るのもやむを得ないことであろう。

このようなペシミスティックなあるいはニヒリスティックな状況把握に対応する態度もそれぞれである。ガリヴァは人間嫌いに陥った。カミュが推奨するのは「反逆と嘲笑」である。「われわれは、自分の申し立てに耳を貸さない世界に対して拳を震わせ、それにもかかわらず生き続けることによって、自分の尊厳を救うことができる、…。これはわれわれの生を無意味でないものとはしないが、われわれの生にある種の高貴さを与えはするであろう。[5]」カミュの態度をネーゲルはそのように捉える。ニーチェは「背後世界[6]」に逃げ出すことを拒否し、超人として無価値の生成の世界を唯一の実在として引き受け、新たな価値の創造へと向かう。コヘレトは、「他者を無視しエゴイズムを抜け出られない」枯渇状態、すなわち「究極目的に囚われた発想から解放され」、「相対的な他者である周囲の人々との出会い」、「他者へのアガペー」において、ニヒリズム超克の方途を、かすかに「神の働き掛け」として感じ取っている。[7]

自分が置かれた状況のペシミスティックな、あるいはニヒリスティックな把握は、空しさ、はかなさ、徒労感、枯渇感等々の、まさに虚無的な「心理学的状態」を引き起こす。そしてそれはある種の病的症状として、何らかの治療的措置が施されるべき事態とみなされている。それが単なる心理的状態であるならば、すなわち私的で一時的な気分の落ち込みのような状態ならば、疲労が休養によって回復するように、いわば自然の治癒能力に委ねれば済むことである。何らかの措置が必要と

みなされるのは、その状態が単なる私的な心理状態であることを越えて、その状態を引き起こした状況のいわば全体の存在状況を顕わにしていると捉えられているからである。丁度、トンネルの壁を叩いて響いてくる音が、単に特定の質をもった音であるだけではなく、壁のある存在状態、すなわち修繕されるべき状態であることを告げ知らせるように。

その「心理学的状態」は存在の、あるいは非存在の如何なる事態を顕わにしているのか。またそれはどのような現れ方を通して、顕わにされているのか。

Ⅰ―2　ニヒリズムの成立構造

スウィフトは、死すべき人間が死なないことにおいて拡大化されて顕わになる、醜さを描き出す。しかしなぜわれわれには、それが醜いものとして嫌悪感をもって現れるのか。身体を持つものすべてに共通の運命、すなわち、衰えと死、われわれ人間が他の動物たちと共有するある種の脆弱性、すなわち朽ち果てて自分たちそのものが老廃物になってしまうという宿命、すべての嫌悪感を生じさせる基盤がわれわれ人間自身のうちにあることを如実につきつけてくる。[8] 人間存在の尊厳が、生から死に至る腐敗過程の汚らわしさと対比され、後者のうちに取り込まれていく。

また、知恵、勇気、節制、正義のギリシャ的四徳を具えていると思われるフウイヌムの高貴さと、無知、怯懦、放埒、不正、さらには不信、憎等あらゆる悪徳を具えていると思われるヤフーの下劣さが対比され、人間存在が後者に類同化される。

スウィフトをあるいは彼が描くガリヴァをニヒリストと呼びうるかはともかく、人間がみずからの存在について思い描いてきた自画像、他の動物等との差異化において描いてきた自画像と価値の序列をともなう存在者の階層構造が、差異化の原理の消滅とともに、崩壊していくさまが見て取れる。その崩壊が、人間存在についての倫理的考察をどの方向に導いていくかはまだ定かではないが、その存在の意味が懐疑的に問われる地平が開かれている。少なくとも、対比と類同化を通して、

暗黙のうちに前提されていた価値づけの図式が揺り動かされ始めている。

ガリヴァの懐疑が人間の存在の意味一般に関わるものであるのに対して、生の無意味さを典型的に顕わにしているとされる、シーシュポスの事例は[9]、人間存在の具体的内容を構成する行為と行為の成立構造に関わるものであるといえるであろう。そして、行為を正当化する実践的推論が、「目的と手段のあるべき連関を明示する推論」の型を採ろうと、「個別の行為を、一般的規範のしかるべき状況への適用例として正当化する推論[10]」の型をとろうとも、その正当化が成立する地平を掘り崩し、行為を無意味化し、ひいてはその生全体を無意味化する。

あるいは次のような事例で考えてみてもよいであろう。囚人のある日の罰としての労働が地面に穴を掘ることであり、次の日の罰としての労働は、前日掘った穴を埋めることである。そのような労働が毎日毎日繰り返される。ある日の労働が、次の日の労働によって無意味化され、その労働がまた次の日の労働によって無意味化される。毎日毎日、自分の労働の無意味さが突きつけられる。（行為の意欲を失わせ、生きている意欲を失わせ、その存在を無意味化する。権力者にとっては、抵抗するものを自己破滅させる「合理的な」方法であろう。）行為を正当化する以前の、規範および目的－手段連関が成立する地平を崩壊させる。ある行為の成果を消滅させる行為や出来事が後に続き、さらに後者の成果（?）を消滅させる初めの行為が後に続く。その無限の反復としてその生の全体が描かれる。個々の行為の意味が無化され、その総和としての生の全体の意味も無化される。人生の無意味さを示す典型的な事例とされる。

行為の正当化を、しかるべき目的の設定とその目的を実現するしかるべき手段の連関で示そうとしても、それが個人的な欲求の対象であれ、個人の欲求を越えた「全体性」のためものであれ、その目的の実現を、あるいはその目的がもつ実現されるべき価値を、その行為自身が否定する構造となっている。また行為の正当化を、既に成立しているとみなされている一般的規範のしかるべき状況への適用として示そうとしても、その規範を適用するしかるべき状況とそうではない状況を考慮し区分する余地は残されていない。

このような行為の成立構造そのものを根底において消滅させるシーシュポス等の事例、すなわち「生の無意味性」の典型に、それを有意味にする要因を、例えば穴を掘ることが、水路や町の建設のためになっているとか、岩を山上に運び上げることが神殿の建設に寄与する等を積み重ねることによって、その無意味さを克服しようとしても無駄なことであろう。それらは既に拒まれている。また例えば、運動選手が勝利のためではなく、運動することそのことに爽快感を感じる場合のように、反復される行為自体が快となりうること、あるいは何らかの薬物の影響のもとでは快となり、「穴掘りが好きだ」とか「岩を運び上げるのが好きだ」という具合に、それらが自己目的化しうることを示しても無益なことであろう。それ自身のためになされる、自己目的となった行為は、一見すると、アリストテレスの最高善や幸福（エウダイモニア）の外観を与えるが、事態は逆である。目的の連関の充足とは逆に、ここにあるのは目的の連関の存立そのもの否定である。そこには、行為を分断化し、断片化した動作の連続のみが残されている。それは（意図的）行為を崩壊させ、身体的動きとそれに伴う私的感覚のみを残すことになる。それは後にみるコヘレトの場合と同様に根底にある「生の無意味さ」を再確認するのみである。

古代の遺跡と現代の状況が重ねられると、人類の歴史が辿った経過は、全体としてはシーシュポスのおこないと変わることがないように見えてくる。興亡を繰り返す人類全体の歴史とシーシュポスの事例の同類化を媒介にして、個々の人間の行為あるいは人生がシーシュポスと類同化される。無意味さのうえにすべてのひとの人生は漂っている。

ガリヴァのペシミズムが、人間存在の意味一般に関わるものであるのに対し、また「人生の無意味さ」の典型としてのシーシュポスが示すニヒリズムが、人間存在の内実を構成する、行為の成立構造に関するであるのに対して、ニーチェが開示するニヒリズムは、行為の主体と行為がそこでおこなわれる世界との関係にかかわるものであると言えよう。行為はその遂行によって世界において実現されるべき「意味」、「目的」をめざしておこなわれる。それはたとえば「すべての生起における道徳的最高規準の実現」であり、「普遍的な幸福状態への接近」[11]である。それらは行為者相互の存在状態として、世界において実現されるべき行為の「意味」であり「目的」である。また、行為が断片化されて価値喪失を招かないためには、ひとび

との行為が「組織化」され「体系化」されることによって、「全体性」のうちに位置づけされことが必要であろう。諸行為のそのような連関によって、「全体性」を保持し、またその「全体性」から個々の行為の価値が与え返される。個々の行為および行為者と世界はそのような相互関係で成り立っている。しかし、そのような世界も、個々の行為者のパースペクティヴを通してしか現出しえない。そして一つの国家が崩壊するときのように、「全体性」の保持と価値の与え返しのゲームに参加するものがいなくなれば、そのような世界も消滅し、実現される場所を失った「意味」も「目的」も、無価値の海をさまようことになる。行為の「意味」や「目的」が、そしてその価値がそれでもなお保持されるべきものであるならば、その実現されるべき場所、そしてわれわれの行為がその価値を汲み取ってくる世界は、変転極まりないこの生成の世界を越えた、永遠の「真の世界」に求められることになる。われわれはその永遠の「真の世界」に参加しうるかは知り得ない。しかしその世界に参加しうる資格にもとることのないようにこの世を生きることが、義務の内実とこの世に生きることの意味を与えることになろう。

このような行為の主体と世界の関係の虚構性をニーチェはあばいていく。その暴露は、単に経験的な事実の指摘に留まるのではなく、行為者と世界の関係の構成方法に関わる原理的な次元においてなされている。すなわち行為の「目的」は、この世で何も達成されてはいないという事実、唯一の実在性の世界としてのこの生成の世界以外に「真の世界」など与えられていないという事実、あるいは価値の源泉としての「全体者」などは、価値信仰の防衛策としての倒錯した考案物に過ぎないという心理学的事実の指摘をこえて、それらの虚構は、世界を認識する人間的な構成方法に由来していることを示している。

「目的」、「統一」、「存在」はカテゴリーであること、すなわちそのカテゴリーでもってわれわれがこの世界に価値を導入したのであり、それを引き抜けば世界は無価値にみえてくる、そのようなカテゴリーである。[12] それは自然の世界を捉えるのに不可欠な、悟性の形式としてのカントのカテゴリーと同様に、あるいはそれを越えて、行為を通して相互にかかわる人間的

世界、すなわち目的や価値、或いはあるべき存在にかかわる行為の世界の存立の可能性にかかわる「理性のカテゴリー（Vernunft-Kategorien）[13]」である。行為は目的－手段の連関のなかで意味を獲得し、諸行為の相互連関からなるその全体性から価値を汲み取ってくる、また永遠の真なる世界との関係からこの世界での人間の義務は課せられてくる。このような「理性のカテゴリー」の虚構性をニーチェはあばきだす。そのようなカテゴリーを通して構築された諸価値は「特定の遠近法」、すなわち「人間の支配形態の維持と上昇への有益性という特定の遠近法の結果」であり、それが「誤って事物の存在（Wesen）のうちに投影されたものに過ぎない[14]」のである。「理性のカテゴリー」を通した人間的・価値的世界の構成は、その生においていわば客観的な価値を求める人間の必要性が世界に投影されたものに過ぎない。このようにして行為の主体をその行為がおこなわれる世界へと結びつけていた関係、すなわち価値の紐帯が断ち切られる。「理性のカテゴリーへの信仰がニヒリズムの原因である[15]」。

しかしこのように断ち切られた行為の主体と世界そのものは、いわば「理性のカテゴリー」の手前と向こう側に残されている。「人間の支配形態の維持と上昇」という力あるいは意志の源泉として、また一切の価値の彩りが剥ぎ取られた「生成の世界」として。そして両者の関係のうちに「新たな価値定立」の方途が開かれる。それはデカルトのコギト、カントの「超越論的主観性」の主観性が、世界との認識論的観点から、行為の主体のいわば主体性すなわち「力への意志」へと変容し、その主観性が徹底化されたものといえるであろう。

ニーチェの「理性のカテゴリー」批判が妥当性をもつか否かは、「理性のカテゴリー」のいわば「超越論的演繹」が成立しうるか否かの検討を要するであろう。自然（現象）の世界についての経験の可能性の条件として、すなわち現れては消えさる知覚の流れというヒューム的な経験を越えて、一定の形と秩序をもった経験のひいては認識の対象としての自然の成立条件として、すなわち経験の可能性の条件として、悟性のカテゴリーが提示されることによって、経験もその客観的な妥当性をえてくるように、人間的・価値的世界の成立の可能性の条件としての役割を「理性のカテゴリー」は担うことはできない

のであろうか。分断化され孤立した知覚の断片からは、相互の「必然的結合」は引き出すことはできず、カテゴリーとしての因果性のもとにそれらを捉えることによって、客観的な妥当性を有する認識が可能になるように、主観性のもとにある価値成立の可能性の条件としての「理性のカテゴリー」を通して、はじめていわゆる「客観的な価値」も成立しうるのではないのか。…この問題に対して、行為の主観性が或る意味その極点に達することによって生じるニヒリズム、すなわちコヘレトのニヒリズムの成立構造を検討したあとのこの考察が、「理性のカテゴリー」の「超越論的演繹」の端緒であることを期待している。…

ニーチェが行為の主観性を徹底化したとすれば、その遠い先例をわれわれはコヘルトにおいて見出すことができる。あるいは既にその主観化をすでにニーチェ以上に推し進め、カテゴリーの手前に再生の可能性を残存させることなく、その存在の意味を徹底的に無化したところにまで進んだようにもみえる。すなわち行為主体と価値的世界の関係にかかわる領域をこえて、行為主体の存在のいわば内側にまでそのニヒリズムは侵食しているのである。

「コヘレトの言葉」で、そのリフレインによって全編の通奏低音をなしているのは、「空しさ」とともに、「わたしは顧みた」、「わたしは知っている」、「わたしは見た」という言葉であろう。わたしが顧みるもの、わたしが見るもの、そしてわたしが知っていること、それらすべてが空しさに続いている。さまざまな経験が、わたしが見るもの、知っていることとして、わたしの経験として、わたしの心理的状態に、すなわちわたしの存在に収斂している。快楽の享受、富の獲得、知恵の探求、労苦の体験、それらの行為と体験が、それがかかわる他者や対象、すなわち世界へと向かって広がっていくのとは逆に、わたしに生じている孤独な経験として、いわば内側に向かって収縮していく。そしてその経験に他ならないわたしの存在の根底に響いてくるのが「空しさ」である。コヘレトにおけるニヒリズムの成立構造をみるために、ここで確認しなければならないことは、経験のわたしへの収斂とその空しさとの「必然的結合」である。確かに世界にどのようなことが生じようとも、それが現出してくるのは、それがわれわれ一人一人に立ち現われてくることを通してである。その立ち現われは、わたしへ

の立ち現われであって、他の何人とともそれが共有されていることを、知のレヴェルにおいては信念を超えて、確認するすべはない。他者との共有が見失われ孤立化したその立ち現われは、「現れては消えさる知覚の束」に他ならないであろう。よりよきものへ向かって、あるいはより高い完全性へ向かって進むような、次に立ち現われてくるものとのつながりを示すものは何もない。断片化され孤立化したわたしの経験すなわち私の存在は、その目的、価値、そして義務から切り離されて、空しく虚無の海を漂うことになる。快の享楽に縋りつくエゴイズムのかすかな名残（刹那的享楽主義）も、虚無の海に沈みこむことに逆らう最後の空しい抵抗に過ぎないであろう。

Ⅰ－3　無からの創造のイメージ

差異化の連関のなかでの、価値の序列をともなった階層秩序における人間存在の位置についての懐疑的帰結（人間嫌い）、行為の成立構造の自己崩壊を内含している人間の行為（人生の無意味さ）、行為主体と価値的世界の紐帯の解消（「明るい未来」の崩壊）、そして最後にあるいはニヒリズムの始点における、人間存在とその「空しさ」との「必然的結合」（「いちばんよいことは生まれてこなかったことだ。…」）、このように、ニヒリズムの事例とその成立構造を析出してみると、その背景にはある共通のイメージが置かれているのがみてとれるであろう。価値秩序とその崩壊、行為の成立とその自己破壊、価値の衣装とその脱ぎ捨て、わたしの生とそれをとりまく空しさの海、このような対比は秩序と混沌、意味と無意味、さらには存在と無という対比の変奏であり、しかもそれは対等なもの相互の対比ではなく、一方が他方を圧倒するような両項の対比である。かろうじて保持されていた人間の尊厳が、動物性の次元にひきもどされ、人間的行為が単なる身体的あるいは物理的ものの動きへすなわち物理的自然へ還元される。そして価値や意味が無価値と無意味にまきこまれ、虚無の海からかろうじて頭を出していたわたしの存在が、その空しさによってふたたび虚無の海に侵食され、のみこまれていく。これらのイ

メージは無からの創造の神話を裏返したものに他ならない。すなわち無から存在へと向かうヴェクトルが存在から無へと逆転されたものに他ならない。裏返しにされたものとはいえ、無からの創造のイメージは、存在と無、意味と無意味の関係を考察する際の共通の背景となって、その問題構成のかたちを拘束している。無へと向かうそのヴェクトルのなかで、（意味や価値に関する）虚無の海をかろうじて意味や価値が漂流している。

あの断崖で響いてきた声もそのような虚無の風に吹き消されてしまいそうになる。しかしそれでも消え去ることなく、かすかにひびいてくる。「そんなことがあってはならない」、「そんなことがおこってはならない」と。このような声がなみされることなく存立し続けうるとすれば、そしてそれが虚無の海にのみこまれてはならない何か大切なことを現出させているならば、存在と無に関するあのイメージを捉え返すことがまず必要であろう。

Ⅱ－1　カテゴリーとしての否定性

無から存在に向かう場合であれ、存在から無へと向かう場合であれ、またその力の優劣関係はともあれ、かのイメージにおける存在と無は相互に他を否定する相対立する関係、あるいは相互に侵食し合う関係で捉えられている。しかしその対立あるいは相互侵食は、同じ平面で対抗し合っている領土争いのようなものではなく、層状となって、無のうえに漂う存在というイメージである。どれほど存在（者）が創造されようとも無の深淵を埋め尽くすことはない。虚無の海を漂う小さな島のような存在の領域、また虚無の海にふたたび沈む怖れをともない、存在の足元には虚無の深淵が果てしなく広がっている。このような存在と無の関係のイメージが、人間の行為や存在の意味や価値と、それらが消滅した状態との対比に重ねられる。そのようなイメージのもとで、例えば、人間の存在の価値は放っておくと無意味さに侵食されてしまう、したがって人間はその存在の価値（尊厳）を、その完全性を高める努力を通して常に保持していくようつとめなければならない、という主張

も出てくるのであろう。

しかしひるがえってみると、われわれが何らかのかたちで、すなわち精神としてであれ身体としてであれ、既に存在のうちにあるならば、そこにどのようなしかたで無が関わってくることになるのであろうか。その存在がヒュームの「知覚の束」のように最も切り詰められたものであっても、それはいわば存在の充足のうちにあって、無がはいり込む余地はないように思われる。知覚されていないもの（知覚の無、或いは無の知覚）がその「知覚の束」に占める場所はない。ニーチェは「目的」、「統一」、「存在」という諸価値の虚構性をそれが「理性のカテゴリー」を通しての構成に由来することに見出していた。確かに実践理性（意志）にその規定根拠が与えるためには、あるいは人格的存在にその存在のかたちを与えるためには、そのようなカテゴリーが不可欠であろう。しかしそれは自らの必要に迫られた特定の遠近法の「事物の存在」への投影にすぎないという。そこにそれらの虚構性という無の性格の由来があとづけられている。しかしこのことは、無は価値的次元の存在のうちで、その存在を侵食するようなしかたで、存在に対立するのではなく、理性が虚構的にその存在のうちそのかたちを与えるために、いわば存在の輪郭として導入したものに過ぎないことを示している。その輪郭が消えれば、存在はそのかたちを失うが、しかし無形の存在として残されている。

そのような否定性としての無は、既に、理性以前に悟性のカテゴリーとして、カントが析出していたものである。ニーチェが語る「理性のカテゴリー」と類比的にいえば、「悟性のカテゴリー」はその存在にかたちを与えるため認識主観が自然（現象）に投影したものにすぎないであろうであろう。現象にかかわる無、すなわち否定性（Negation）は質のカテゴリーに位置づけられている。この否定性は、思えば極めて不思議な機能でもある。おそらくは人間存在の時間的性格、すなわち未だ無い未来と、もはや無い過去とから現在が構成されているあり方に淵源する機能であろう。眼の前の赤いバラを見て、われわれは「このバラは白くない」という。眼の前のこのバラは赤いことにいわば充足している。われわれの知覚もその赤さに充たされている。それが「白くない」として捉えられても、その存在の充足が損なわれることはない。否定ひいては無は、

悟性が現象にそのかたち（輪郭）を与えるために投影した自己の形式に過ぎない。無は存在と対抗しそれを侵食しうるような力をもちうるものではない。それはいわば無限定の存在に個々の存在としてかたちを与えるための輪郭線としての役割を担っている。それは幾何学的な線が実在的空間の部分を構成してはいないように、経験の内容を構成することはない。否定性および無とはいわば無限定の存在の充足を分母として、その舞台の上で、個々の存在者を切り出す機能として、その個々の存在者を構成しているのである。

このようにカテゴリーの機能をみてくると、ニヒリズムのイメージする存在と無の関係は逆転する。虚無の大海にかろうじて浮かび、あてどなくさまよう小舟のような存在という無と存在の関係ではもはやなく、無は存在の充足のという分母の上での、個々の存在者を輪郭づけ登場させるものとなる。無は個々の存在者の区分け以上の役割は持っていない。われわれは価値的次元の存在であれ、現象的存在の次元であれ、存在の充足のもとにある。そして、カテゴリーがその存在に形式以外の何らかの実在的な内容を付け加えることがないのと同様に、何ら実在的な内容を引き去ることもない。

「人生の無意味さ」、道徳的価値の虚構性等々の懸念が生じ、それらを問題にすること自体が、われわれが既に、まだその正体を見いだしえていないとしても、その有意味性のうちに、また道徳的価値の存在のうちにいることを証示しているであろう。手元にあるこの紙幣が、単なる紙くずになってしまうのではないかと心配することは、すでにそれが貨幣制度のなかにあることを示しているのと同様である。貨幣制度の外にいるものにとってそのような懸念が生じることはない。そしてまた、既に貨幣制度のうちにいるものにとって、「この紙幣は紙くずに過ぎない、紙幣として存在しているのは制度的虚構（擬制）に他ならない」と指摘されても、その指摘は、自明の理であり反論すべき何ものも提示していない。それは貨幣制度の存立に何らの影響も与えることもない。その制度が人為的に構成されたものであっても、それに参与するものの活動において有効に機能し存続している限り、いわば制度的実在性を有しているのである。

Ⅱ－2　問いの構造

しかし人間存在の意味、道徳的価値の存在について、そのような制度的実在性を確保するだけでは不十分であろうし、またある種の違和感も残される。人間存在が制度的に構成されている共同体のメンバーとして或る役割を担い、またさまざまな規範がその共同体の存立を支えている限り、人間存在と諸規範が制度的実在性を有している、またその真理性と存在する意味を有している、ということはできる。たしかに、若い母親がわけのわからないまま赤子を抱いて海に身を投げ死んでいくことを余儀なくされる、そのようなことがあってはならないと思うとき、その母親と赤ん坊の存在の大事さに、かれらが担っている共同体における役割が含まれていることは否定できないであろう。しかし、それに尽きることではない。個々の人間存在の意味（価値）をそれが属する共同体から、その存立への寄与分によって得ようとすることは、ニーチェが指摘したように、おのれの価値を信じうるように構想された理性の倒錯に他ならないであろう。そして何よりも、意味がそこから汲み取られてくるべきその全体者（共同体）の存在意味はまだ証示されてはいないのである。共同体の存在の意味は逆に、個々の人間存在の意味から、すなわち何か大切な存在の意味を有している個々の人間存在を守り存続せしめることから成り立っているのではないか。「そんなことがあってはならない」ということがどこかから響いてくるということも、その「そんなこと」が大切に保持されるべき人間存在の意味をなみしていることに対する、われわれのいわば存在論的な反応なのであろう。その大切に保持されるべき人間存在の意味が開示されなければならない。われわれは、人間存在の意味を問う、その問いの成立構造から改めて検討することが必要である。

ペシミスティックな人生の意味についての問いは、存在と無、意味と無意味に関する共通のイメージを背景に問われていた。果てしれぬ虚無の海を漂う小さな島のような存在、束の間の享受の後には、再び虚無の海に沈む定めになっている存在

と価値。それがふたたび虚無の海にのみこまれる宿命であるのは、それらが自己崩壊の構造を内含し、あるいはその存立が実在性を欠く虚構に依存しているからとされた。人生の、そして人間存在の無意味さは、人生の意味についての問いに対する、不可避の回答でもあった。このような構図に対して、無価値や無意味に含まれる無の（概念の）虚構性、その実在性の欠如を示すことによってもたらされたのは、存在と無の関係の逆転であった。虚無の上にかろうじて漂う存在ではなく、いわば大文字の存在の上で成立している、いわば小文字の存在と無の関係であった。そしてその関係は相互に他を消滅させるようなものではなく、存在者と存在者の存在を成立させるその輪郭との関係であった。この構図のもとで、われわれは人生の無意味さを問うことあるいはその懸念が生じるということ自体が、その有意味性の圏域での問いであることも確認しえた。この構図のなかで、なみされてきた事実を超えて、あの守られるべき人間存在の意味はどのように析出されるのであろうか。

人生の意味、あるいは人間存在の意味を、言葉の意味の成立構造との類比で考えるならば、それはまず、能記と所記の関係として捉えられるであろう。すなわち個々の人間の人生あるいは存在を記号（signifiant）として捉え、その記号によって意味されるもの（signifié）としてその意味が求められる。人間の個々の行為、あるいは行為の総体は、或る概念あるいは理念を体現することにおいてその意味をもつ、という具合に。しかしこの段階はまだ単なる音声やインクのシミが言葉や文字として成立する段階であり、人間の行為に関して言えば、単なるその身体的ふるまい（物理的動き）が行為という地平に移される段階であろう。ペシミスティックな思考は、この行為の地平が崩壊して身体の物理的動きの地平に陥るのを懸念するが、われわれは既に、行為の地平を有意味性の圏域として確保している。いま求められているのは、その有意味性の溶液から、或る特定の意味をすなわち人間存在の意味を結晶させ析出することである。

既に言葉が成立している地平において、言葉の意味は、それが記述し或いは指し示す世界の事態によって与えられる。あるいはそれが真であることによってその意味が確定される。「雪は白い」は雪が白いときに真であり、その意味も確定する。

行為に関して言えば、すなわちある身体のふるまいが、行為の言葉で記述されることが既に成立している段階で、その行為が意味をもつとはどのような事態であるのか。つまり、「彼は左右の足を交互に前方に繰り出している」のではなく、行為が「彼は散歩をしている」、「彼は健康を維持している」等々と記述される時、それらが意味をもつとはどのような事態であるのか。それはそのように記述されている行為がまさに成立しているということであろう。すなわち行為のカテゴリーのうちに配置された位置を占め、他者の行為および自分の他の行為との連関のうちに位置づけられているということであろう。そのような連関から断ち切られた時、シーシュポスの事例が示したように、或いはそのような行為がその行為を表象する私的な心理的状態に還元される時、コヘレトの事例が示したように、無意味へと陥ることになったのである。また他の行為との連関が、目的－手段の連関や、全体とその個別的要素との関連であれば、ニーチェが暴露したような倒錯した意味づけに陥ることになる。すなわちそれ自身の欠如をうめるために、虚構された源泉から価値を汲み取ろうとすることになる。このような無意味性に陥ることなく行為がそれ自身の意味を確保しうるのは、他の行為との連関を保持しつつ、それ自身でいわば自らの意味を成立させているときである。すなわち、その行為がいわば「遂行的に」自らの行為を成立させ、その行為によって、他の行為との関係を創出し成立させる時である。そのような原初的な行為の意味の成立のうえに、目的－手段という行為の連関構造もはじめてその有意味性を得ることができる。

Ⅱ－3　暫定的結語

人間的行為の意味の成立が以上のかたちをとるならば、行為がそこで生じる人間存在の意味も同じかたちを採るであろう。すなわち、人間存在がその存在の現実態において、「遂行的に」実現している事態において、その存在の意味は成立しているということになる。

事柄の成立順序から見れば、その意味の成立のうえで行為もはじめて成立しうるというべきであろう。しかし人間存在がその存在において、いわば「遂行的に」成立させている事態とはどのような事態であるのか。それは非認識説（non-cognitivism）が行為の目的として想定するような個々の感情や意志ではありえず、また功利主義が設定するような究極的価値としての心理的な欲求状態[16]でもありえない。海に身を投じた若い母親の現実の生活が幸福に縁のない過酷なものであったとしても、また、泣き声が外に漏れないように口を塞がれた赤ん坊の命が、まだ自覚されることもない動物的な生の欲求以上のものをもたなかったとしても、それでも「そのようなことがあってはならない」という声が響いてくるのは、人間存在の意味を快や感情や欲求とは別のところに置いているからである。赤ん坊の存在は、その存在において、母親というまた父親という存在を創出し、また夫婦、親子の関係の存在をつくり出している。そのように人間存在はその快苦の多寡にかかわらず、その存在においてさまざまな存在と関係を創出しつつ存在している。快や自由ということが問題となりうるのもこのような人間存在の原初的な存在の意味の存立を前提してのことである。コヘレトが示したようにその欠如を快によって埋めることはできず、その欠如のもとに自由を語ってもそれは空虚なものとなる。各人の存在はそのような存在の開示として存在している。なにか大切なもの、大事に保持すべきものとはそのような存在であろう。そのような存在の暴力的無化に対して、「そんなことはあってはならない」という響きはいわば存在自身が発しているのであり、それを聴き取る各人の存在は、自らの存在の意味を通して、その存在の響きに共鳴しているのであろう。

註

（1）聖書（新共同訳）、コヘレトの言葉、4-2, 3、p1038

（2）Cf.『西洋哲学の誕生』、佐藤康邦他編著、第7章3（関根清三）pp98-99、放送大学振興会、2010年

（3）ニーチェ、『権力への意志』上、ニーチェ全集12（原佑訳）、pp27-31、筑摩書房、1993年。
Friedrich Nietzsche, Werke in Drei Bänden III, pp676-678, Herausgegeben von Karl Schlechta, 1966
Cf. ハイデッガー、『ニーチェⅡ』、ハイデッガー全集第6－2巻 pp58-65、創文社、2004年
（4）Cf. マーサ・ヌスバウム、『感情と法』（河野哲也監訳）、第2章、pp89-158、慶応義塾大学出版会、2010年
（5）トマス・ネーゲル、『コウモリであるとはどのようなことか』（永井均訳）、p37、勁草書房、1989年
Thomas Nagel, *Mortal Questions*, p22, Cambridge UP, 1979
（6）ニーチェ、『ツァラトゥストラ上』、ニーチェ全集9（吉沢伝三郎訳）、p55。Friedrich Nietzsche、前掲書、Ⅱ、p297
（7）関根清三、前掲書、pp101-103
（8）Cf. マーサ・ヌスバウム、前掲書、pp113-118
（9）Cf. David Wiggins, 'Truth, Invention, and the Meaning of Life', in *NEEDS, VALUES, TRUTH*, p92, Basil Blackwell, 1991
（10）黒田亘、『行為と規範』、p37、勁草書房、1992年
（11）ニーチェ、前掲書（註（3））、p28
（12）Ibid.p30
（13）Friedrich Nietzsche, 前掲書、Ⅲ、p678
（14）Ibid.
（15）Ibid.
（16）Cf. D.Wiggins, 前掲書、p98,pp103-104

（本学大学院比較社会文化研究院・教授）